
鈴 -RIN-

琉璃華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴
- RIN -

【Zコード】

Z47090

【作者名】

琉璃華

【あらすじ】

ある夏、私は肝試しで不思議な女の人と出会ひ。

その人の名前は鈴^{りん}

鈴の音

「藍那！…早く来ないと知らないよ…？」
「ちよ、ちょっと待つて…！」

夏の暗い山の中、

懐中電灯の光が〇五つあった。

前に〇四つ、後ろに〇一つ。

その後ろで一人、寂しく歩いているのが
私、吉村藍那。

夜つてだけで暗いのに
周りに木があるせいか
さらに暗いように感じた。

「はあ…。なんで肝試しなんかやるのかね」

そう言つて私はため息をついた。

私たちの高校では
あることが噂になっていた。

夜中に学校のすぐ近くの山、
つまりこの山の奥にある
古くて小さな神社に行くと

狐のお化けが出るやうなことを……。

この噂が本当かどうか確かめるため
私たちは今ここにいる。

「あ、あれじゃない?」

「うげ……気持ち悪い……」

前を歩いていた四人が立ち止まり、
懐中電灯で前の方を照らす。

私は見えなくともなんとなくわかった。
そこに神社があることが。

私は少し足を早めてみんなの元へ急いだ。

「うーわ……気味悪い……」

私は神社の姿を視界に入れた瞬間
ヤバいと思った。

なんていうんだろう……

神社の周りだけ

空気が違うような気がする。

ヤバい……

それしか言いようがない。

私は一步後退りした。

「よし… やるか。

順番にお参りしていくぞ。

何か起こうたらあれを使え、いいな?」

みんなは黙つて頷いた。

正直もう帰りたい。

絶対この雰囲気…出る。

「まずは俺かな」

クラスのお調子者、じゅうすけ晃佑が

神社の方へ足を進める。

私を含めた他四人は
黙つて晃佑の背中を見つめる。

だんだん晃佑の背中が見えにくくなり
私たちは必死に目を凝らして晃佑を見る。

晃佑は賽銭箱のところで立ち止まり
用意していたお金を賽銭箱にいれて
駆け足で戻ってきた。

これだけのことなのに
とても長く感じた。

「なんともなかつたぞ?

狐の靈なんてほんとにいるのか?」

つまらなさそうに晃佑が言った。
わざわざまでじっくりした奴がよく言つよ…

私が苦笑いしていると

隣の女の子、奈美なみが前に出た。

「いやいや、いるでしょーーー！
あたしが行ってみてくるーーー。」

そう言つと懐中電灯を神社の方に向け
ずかずかと前に進んでいく。

みんな唖然としていた。

女の子とは思えない…

奈美はお金を取り込み、
周りを見渡してから
回れ右をして帰ってきた。

「確かになんにもなかつたやーーー」

ガツカリしながら奈美が言つ。

私は出たらやばいと思つよ、うん。

私がため息をついていると

紗理奈が肩に手をおいた。

「とりあえず一人ずつ行ってみよ?
時間経つたら出てくるかもしないし……」

いや、だから私は出てほしくな……

「そうだね。次だれ ?」

なんかもうみんな怖さなんて
どこかにいつてしまっていた。

私一人だけまたため息をついた。

一人、また一人と神社に行き、
お金を入れて、戻ってきた。

紗理奈が駆け足で戻ってきて
ついに私の番が回ってきた。

「藍那、最後なんだから
ちょっと長めに見てきてね……」

奈美が楽しそうに私に言った。
あー……もう泣きたい……

「はいはい……」

適当に返事をして神社に向かう。
みんなは期待しながら私を見送った。

神社に近づくにつれて
姿がはつきり見えてきた。

とても小さな神社で、
鳥居の近くには狐の像が
道を挟んで2体置かれている。

狐の像と田を合わせるだけで怖かった。

賽銭箱の前に立ち、
お金を入めて田をつむり手を合わせる。

はあ…

絶対私たちバチ当たるって…

あーまぢいめんなさい…

そう思つたそのときだつた。

チリーン…チリーン…

私は驚いて顔を上げて
あたりを見渡した。

何今の?

鈴…?

チリーン……チリーン……

たしかにまた鈴の音が聞こえた。
小さかつたけど間違いない。

「…誰かいるの？」

後ろを振り返りながら

誰も居ないはずのところに聞いてみる。

「えやーーー！」

「ーーー？」

返事の代わりに叫び声が聞こえた。

みんなの方を見てみると

鳥居のそばに白く光る物体が一つ。

そう、像の狐の靈だ。

やつぱり居たんだ…
ヤバい、どうしよう

「みんなーー！ 塩だーー！
塩を投げるんだーー！」

晃佑が必死に叫ぶ。

私たちはここに来る前に
各自、塩を持ってきていた。

みんな持つてきた塙を狐に投げる。

…でもなんにも起いらなかつた。

「ちよ、ちよっと…

どうすんのよこれ…」

奈美が半泣きになつて

もう一人の男の子、大輝にしがみつく。

「どうするつて…

逃げるしかないだろ…！」

そつと瞬間

みんなは元来た道を戻るつとする。

しかしそんな簡単に帰れるわけがない。

一匹の狐は一瞬で移動し、
道をふさいでいた。

「…！」

くそ…」

さつさよりも狐との距離が近くなり
みんな後ろに下がつた。

私はいきなりすぎて
動くことができずについた。

ただ呆然とみんなを見てるだけ。

何をすればいいのかわからなかつた。

迷つてゐるうちに

みんなは狐に距離をつめられて行く。

いつの間にかみんな黙つて
体を動かせずにいた。

これって金縛り…？

どうしよう…

なんとかしなやや…！

私はみんなのところへ走つた。

どうやってこの靈を追い払うとか
どうやってみんなを助けるとか
そんなことは全く考へてない。

でも一瞬なら金縛りを
解くことができるかも…。

そう思つて走り、

みんなの姿がはっきり見えたときだつた。

「止まつて…。

「この子達を追い払うのは
私の仕事…。」

私は驚いて立ち止まり、
声が聞こえた方を見てみる。

そこにはいつの間に現れたのか
赤い着物を来た女人が立っていた。

長くて真っ黒な髪を
だんごにして1つにまとめ、
背中には剣をかついでいた。

相当髪が長いのだろうか
だんごからまだ髪が出ており、
その髪は風でなびいている。

そしてかんざしをしており、
そこには鈴が2つついていた。

女人は黙つて剣を抜き、
剣の先を狐に向けた。

「…成仏しなさい」

女人人は確かにそう言った。

そして言つた瞬間、狐の前に移動し、

狐の顔に剣を突き刺した。

チリンと鈴の音が鳴り響く。

「ギイ……！」

刺された狐は耳をつんざくような
声をあげて消えていった。

「す、す」「……」

女の人はすぐにもう一匹の方に
剣の先を向ける。

剣を向けられた狐は

唸るのをやめ、その場に座り込んだ。

それはまるで

主人に従う犬のようだった。

その姿を見た女的人は剣をしまい、
狐の前まで歩いていき、
優しく狐の頭を撫でた。

すると狐の姿は薄くなり、
しばらくするとその姿はなくなっていた。

助かつた…

私はへなへなど

その場に座り込んでしまった。

「ねえ」

いきなり上から声が降ってきた。

私はビクッとして顔を上に上げる。
さつきまでなかつた女の人の姿が
今日の前にあつた。

女の人は上から
私を不思議そうに見つめる。

「な、なんでしょ?..」

少しふくづくしながら言つた。

この人が普通の人じゃないことは
さつきのを見てわかつていい。

でもなぜだか怖くなかった。

ただ何者かわからぬから
普通にしゃべれない。

女の人はしゃがみ、
私に目線を合わせた。

近くで見ると

肌が白くてとても綺麗だ。

「なぜあなたは動けるの？」

「…え？」

なぜこんなことを聞くのか
全くわからない私は
何も答えることができなかつた。

無言の私を見て、

女のは首を傾げた。

「今私は『この世の時間』を止めてるの。

だからあの子達は止まっている。

なのにあなたは普通に動けている。

どうして？

あなたはこの世の人間でしょ？

「ま…まあ…」

というかこの人は一体何？
時間を止めてるって…
しかも『この世の時間』？
意味がわからない…

女のは立ち上がり
ニコッと笑つた。

「あなたみたいな人初めてだわ。
気に入つた。」

お話ししますよ？

あなたも私のこと知りたいでしょ？

「はあ……」

勝手に話が進んでるような気がする…

私どうなるの？

「大丈夫、みんなは家に帰しておくわ。
さ、行きましょう」

女の人は手を差し出してきた。

私は少し戸惑つたけど

私もこの人のことが知りたい。
どうなつてゐるのか知りたい。

私は手を握り、立ち上がった。

「あ、名前言つてなかつたわね。

私の名前は鈴^{りん}。

よろしくね？」

鈴はそう言つてまた笑つた。

かんざしの鈴がまた音を鳴らして揺れた。

誘い

私が鈴に連れられてやつてきたのは
わつきの神社の中。

見た目はボロボロなのに
中に入つてみると意外と綺麗だった。
綺麗というか別世界つて言つた方が
あつてるかもしれない。

中は畳で、蠅燭があり、
それが明かりになつていた。
あとは座布団があるだけで
ほかは何もない。

これも鈴の力なのかな?

「いい座つて」

鈴は一番入り口に近い座布団に
座るよつに言つた。

言われた通りに黙つて座る。

そして向かい合つよつにして
鈴が座つた。

なんか落ち着かないなあ…

「そんな緊張しなくてもいいの？」

鈴は背中の剣を磨きながら言った。

そんなことを言わると
余計に緊張してしまった。

「はあ……」

曖昧な返事をすると

鈴は思ひ出しそうに顔を上げた。

「わうこえばあなたの名前は？」

「…く？」

「なまえつ

いつまでもあなたつて呼ばれるのは
気持ち悪いでしょう？」

お、おっしゃる通りです……

「よ、吉村藍那です……」

私は小声で囁いた。

でも周りが静かなせいか
自分でもよく聞こえる。

「藍那……いい名前ね」

やつらのいた鈴はフツと笑う。

鈴の「」の笑い顔を見ると
不思議と安心してしまう。

やつと緊張が解けた気がした。

ふう～と息をはいて
肩の力をぬいた。

「どうしてあんなことしたの？」
「…え？」

また肩に力が入る。

一瞬何のことと言っているのか
わからなかつた。

「神社で遊んでたでしょ？」
「あ…」

そうだつた。

いろんなことが起こりすぎて
私は今までの出来事を
忘れてしまつっていた。

私はゆつくり話し始める。

「学校の噂でこの辺に

お化けが出るって聞いて

本当に出るのか確かめに来たの。

そしたら……あんなこと……

「

私はなぜか下を向いてしまう。

怒られるような気がして

鈴の目を見るのが怖かつた。

「そう…。

でもあなた……いや、藍那は
来たくて来たわけぢやないみたいね。

」

「……なんで……」

私は驚いて顔を上げた。

顔を上げると鈴の笑つた顔が
視界に入ってきた。

確かに本当のこというと

私はこんなとこ來たくなかつた。

あんなくだらないことしても
なんの得にもならない。

それでもこりに來た理由…

いや、連れてこられた理由つて
言つた方が正しいかも。

「靈の姿が見えるみたいね。」

鈴は静かにそう言った。

そう、私は靈が見える。

だからあの子たちに連れてこられた。

最初は嫌だつたけど

逃げるのはもつと嫌だつたから
最終的に自分で着いていったけどね。

…あれ？

でもなんで鈴は知ってるの？

「なんでそのこと…」

私がそいつと鈴は田を丸くした。

「なんで…

私のこと見えてるぢゃない。

それに私には靈力が見える。

藍那を見たときすぐわかったわ。」

鈴は呆れたように言った。

そしてそれを聞いた私は変に納得した。

やつぱり鈴つて…

「靈…なの？」

「なにをいまさら…！」

わかつてゐくせに～

まあそこいらへんの奴とは

少し違つけどね

あー…やつぱり…

靈ですよね…

私は苦笑いするしかなかつた。

でも『少し違つ』って
どうじこじなんだらひ。

「今まで見てきた靈、
さつきの狐と違つとこない？」

鈴は剣を磨く手を止めずに
私に問いかけた。

今までと違つといひ…

氣になつてこるのは確かにある。

…今聞くしかない。

「…なんで鈴はそんなに
生きてる人間に近いの？」

さつきまで氣になつっていたこと…

それは鈴は生きてるみたいだといひこんど

私が今まで見てきた靈は
いかにも死人という感じがしていた。

でも鈴は違う。

生きてる人間そのもの。
でも靈だという。

不思議でたまらなかつた。

鈴は剣を床におくと
私の目を真っ直ぐ見た。

「正解。

私は靈をあの世に帰すのが仕事なの。
だから普通の靈とは違つて
この世の人間に近い。
あの世とこの世の間の人間つて
とこかしらね」

鈴は笑つて言つた。

靈を帰す…

そんな仕事あるんだ…

とこか頭の中が
ごちやごちやになつてきた。

私がポカーンとしていると

鈴はそうだ！…と言つて手を叩いた。

「ねえ、藍那

仕事手伝つてくれない？」

「……え？」

…今なんとおっしゃいました？

「最近仕事が多くて大変なのよ。

大丈夫、戦い方は教えてあげるし、
武器だつてあげるわ。

だからお願ひ！！」

そう言つて鈴は頭を下げた。

この人何してんのあああ

「ちょ、ちょっと待つて…!
頭上げて…！　ね…？」

私は立ち上がりつて

とりあえず鈴に頭を上げさせた。

鈴は真剣な表情で私を見る。

「今日藍那に会つたのも
何かの縁だと思うの…！」

藍那みたいな強い靈力を持つてる子
そんなにいないわ…！」

鈴は必死に言ひ。

でも私は
どうしたらいいのかわからない。

靈を帰すなんてことできない…

「わ、私にはそんなこと…」
「大丈夫!! 私がいるわ!!」

なんだろ？

鈴が必死すぎて
怖くなつてきた…

こんなに言われると

断りずら…

「と、とりあえず落ち着いて?」

私はなんとかして鈴を座らせた。

鈴は「めんなさい」と言つて

落ち着いてくれた。

「なんで私なの?

私じゃなくても他にも…」

「私の姿をハツキリ見れたのは
藍那、あなただけなの」

鈴は私の言葉を遮つて言った。

私はといつと
驚いて言葉が出なかつた。

鈴の目が真剣だったから。

今まで真剣じやなかつたわけじやない。
でもさつきとは違つた。

「こんな仕事 そこらへんの人間に
ほいほい頼まないわ。
…というか頼めない。
私が姿をできるだけ隠してゐるからね。
でもあなたは私が見えてゐる。
それは靈力が高い証拠。
だから頼んでるのよ。
靈の数が増えすぎて
私一人じゃ無理なの。
だから…お願い。」

私の目の前で

また鈴は頭を下げた。

さつさとは違つて静かに。

「鈴、顔あげて？」

鈴はゆつくつ顔を上げる。

私、決めた。

「私やつてみるよ、その仕事」

その言葉を聞いた鈴の顔は明るくなり、それをみた私も自然に笑顔になつた。

今田会つたばつかりで

しかも相手は靈で、
いきなりこんなことを頼んできて
普通なら断るだらう…

でも私にしかできないのなら…

私にしか靈を救えないというのなら
私は、やる。

「嬉しいわ！！

じゃあじい様に報告しないとねーーー！」

じ、じい様…？

鈴のおじいさん？

つてことは…

私の顔は強ばつた。

「じい様！！

助つ人ですよ 」

鈴は部屋の隅のほうに話しかけた。

どんな人なんだろ…

きつといかついんだろうつな …

ああ … 怖い

はあ … と私がため息をついたときだった。

「話は聞いておったよ。

まったくお前は…

会つたばかりの娘に

こんなことを頼みよつて…」

奥の方から声が聞こえ、

少し顔をあげると黒い物体が見えた。

ああ、これがじい様…

案外かわいらし…

え？

「ね、ねこおおおおおーー?」

私の目の前には黒猫がいた。

猫がしゃべつてる…

叫ばずにはいられなかつた。

「わしはヤマトじや。

まあお前さんもじいと呼んでも
ええがのう」

そう言つて黒猫…いや
じい様は笑つた。

私はもう苦笑いしかできない。

今年の夏は
驚くことばかりになりそうですが…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709o/>

鈴-RIN-

2010年11月12日00時43分発行